

題目 日本人の自己卑下ヒューリスティックについての実験研究

氏名 鈴木直人

指導教官 山岸俊男

本研究の目的は日本人の自己卑下行動を調べることである。従来、日本人の自己卑下行動は「ホンネとタテマエ」という観点から説明されてきた。これは、日本人は本心から卑下しているのではなく、他者の印象操作を目的とした自己呈示戦術として卑下して見せているに過ぎない、とする説明である（自己呈示仮説）。

一方、北山（1998）によれば、日本人には自己の欠点に注目してそれを克服しようとする自己向上動機があり、それゆえ、日本人は自己の劣った属性を過大に見積もるようになるという（自己向上動機仮説）。この観点に基づき、Heine, Takata, & Lehman (2000) は、反応時間などの暗黙の行動指標を用いた実験を実施し、日本的自己卑下が自己呈示戦術を超えた行動であることを実証した。

本研究は、この Heine *et al.* (2000) の示唆を踏まえつつ、日本的自己卑下行動に関する新たな説明原理を提出するものである。我々が着目したのは以下の 2 点である。第一に、日本的自己卑下は戦略的行動というより、自動的反応である点。第二に、その自動的反応を引き起こすのは、自己向上動機といった内的要因ではなく、自己評価を求められる状況という外的要因である点である。この観点に基づき本研究は、日本人が謙虚に振舞うのは彼らが日本社会に適応的な自己卑下ヒューリスティックを獲得しているからである、とする「自己卑下ヒューリスティック仮説」を提唱し、2つの実験によりこれを検証した。

実験は2つの部分で構成されていた。第1部では、参加者は20題からなる認知テストを受けた。第2部では、そのテストの自身の成績が平均を上回っているかあるいは下回っているかについて判断を求めた。実験では、参加者の状況認知を操作することによって、日本的自己卑下行動が状況に応じた反応であるとする仮説を検証した。「ボーナス条件（実験条件）」では、参加者は正確に判断すると、ボーナスを獲得できることになっていた。「固定条件（統制条件）」では、参加者は判断の如何に関わらず固定金額を得ることになっていた。自己卑下ヒューリスティック仮説によれば、「固定条件」でのみ自己卑下傾向が見られ、「ボーナス条件」では自己卑下傾向が見られないと予測される。結果は、自己卑下ヒューリスティック仮説を概ね支持するものであり、北山らの理論とは一貫していなかった。